

# 日本統治期朝鮮と台湾における日本語俳句受容の 比較研究序説

磯田 一雄

はじめに：政治社会的状況と文化交流との混同  
——パトリア・ツルミが見落としたもの

1. 日本統治期の朝鮮俳壇と「朝鮮の子規」朴魯植
2. 日本統治期の朝鮮と台湾における俳句の展開の比較  
的考察
3. 地方色を俳句にどう盛り込むか（1）——「台湾季語」  
と『台湾歳時記』
4. 地方色を俳句にどう盛り込むか（2）——「朝鮮色」  
と『朝鮮固有辞典』

おわりに：解放後の韓国と台湾における日本語短詩活動

キーワード：ホトトギス雑詠欄・朝鮮色・  
台湾季語・歳時記・朴魯植

## はじめに：政治社会的状況と文化交流との 混同——パトリア・ツルミが 見落としたもの

東アジアにおける日本の植民地支配の実態を見ていくうえで、パトリア・ツルミが彼女の主著（1977年）で提起した朝鮮と台湾の比較の視点は、今なお多くの点で有効だと思われる<sup>1</sup>。筆者もこれまでその線に沿って朝鮮と台湾を比較考察しつつ、日本の植民地支配の実態の一部を解明してきた。しかし朝鮮と台湾の植民地教育を比較して論じた、ツルミの1984年の論文の

結論部分の以下のような叙述には問題があるといわざるを得ない<sup>2</sup>。

植民地期が終わるまでに、日本の教育（植民地教育）を受けた台湾の中上階層は日本的な趣味や態度の全体を吸収したが、朝鮮では同じ教育を受けた中上階層は戦闘的民族主義に沸き立った（私訳、括弧内は筆者の挿入）。

この箇所について、呉成哲（当時・韓国清州教育大学）は「日本的な趣味や態度の全体の受容（absorbing a whole spectrum of Japanese tastes and attitudes）という評価が、具体的にどんな証拠に基づいて、何を意味するのかは確実に示されていない。…彼女の1984年の朝鮮と台湾に関する比較論文は単純すぎる二分法的対比に終始している」と批判している<sup>3</sup>。この点は既に一度論議の対象とされているが<sup>4</sup>、これを一歩進めて日本語短詩文芸（俳句）受容を対象に具体的に検討してみたい。

確かにツルミのこの対比の仕方には問題がある。台湾については文化的状況、朝鮮について

<sup>1</sup> E. Patricia Tsurumi, *Japanese Colonial Education in Taiwan, 1895-1945*, Harvard University Press, 1977, p.172ff. The Contrast between Korean and Taiwanese Responses.

<sup>2</sup> E. Patricia Tsurumi, *Colonial Education in Korea and Taiwan*, R. H. Meyers and M. R. Peattie (eds), *The Japanese Colonial Empire, 1895-1945*, Princeton

University Press, 1984, p.309.

<sup>3</sup> 呉成哲「植民地朝鮮における初等教育の拡大過程——台湾との比較研究のための一試論」『台湾教育史研究会通説』第三十八期、2005年4月（原文、日本語）。

<sup>4</sup> 磯田一雄「比較植民地教育研究の対象と方法——E. P. Tsurumiの批判的検討のための視点をめぐって——」『東アジア研究』第43号、2005年12月。

は政治社会的状況と、次元の異なる状況を対比しているからである。植民地期末期に台湾人の中上層が日本文化の全体を吸収していたとするなら、朝鮮においてはそれをしようとしなかったとか、あるいは台湾人以上に熱心に吸収しようとしたとかいうような、同じ次元での対比にしなければ、そもそも比較にならないはずである。ツルミはなぜそういう書き方をしなかったのだろうか。たとえば日本の伝統短詩文芸・俳句の受容状況について見ると、植民地化は台湾のほうが早かったが、俳句についていえば、以下で検証するように、台湾よりも朝鮮のほうが普及も速く、レベルもより高かったといえるのである。

察するに、ツルミは台湾人の文化状況はかなり詳しく調べていたけれども、それと対比できるほど朝鮮については調べが行き届いていなかった、要するに朝鮮の実態をよく知らなかったのではないか。それで反日・抗日的態度のような政治社会的状況にすりかえてしまったのではないか。さらにいえば抗日・反日なら高度の日本文化になど関心が向かないはずだ、というような先入観があったのかもしれない。

ツルミに限らず、韓国・朝鮮における抗日的態度に目を奪われるあまり、日本文化の吸収に対しても一貫して拒否的な態度が強い（はずだ）、というような先入観がこれまでかなり一般的にあったように思われる。朝鮮では日本語の普及率が台湾より低かったとか、就学率が台湾より低かった、というように。しかし実際には日本語の普及状況も、進学熱も台湾より朝鮮のほうが高かった。それが逆のように見えたのは、「就学率」のような「統計」の数字を素朴に信じ込んで、その背後のからくりが見えにくかったことも一因と思われる（台湾総督府の日本語能力の基準は朝鮮より甘かった。朝鮮では

学校の不足に加え、定員を満たしていない学校が多かった、など多くの問題点が隠されていた<sup>5</sup>）。

政治的社会的状況と文化交流などの状況は、全く無関係ではありえないにしても、相対的に区別されなくてはならない。一例を挙げれば、俳句や短歌のような日本語短詩文芸は、まさにその「日本的な趣味や態度」の受容の状況を測る指標の一つとみなすことができよう。反日的・抗日的な政治的社会的状況にもかかわらず、俳句や短歌は日本統治期の朝鮮でも盛んに行われていたからである。確かに俳句や短歌は一時期「皇民化」の道具にされたこともあったが、本来は高度に洗練された、短詩形なるゆえに子どもにも近づきやすいものでありながら、千年余の歴史をもつ独自の文化形態なのである。これに接近するあるいは吸収するということは、政治社会的状況よりも、基本的にはむしろ個人や社会の持つ文化状況に左右される度合いのほうが大きいのではなからうか。

最近の日韓関係は厳しい状況にあるが、2013年5月11日午後、ソウル俳句会20周年記念行事として、国際交流基金の後援を受けた「日韓文化交流ワークショップ・はじめての俳句inソウル」が神野紗希を講師としてソウルで行われている。当日は約80人の参加があり、韓国人も多数参加したといい、NHKテレビでも放映された<sup>6</sup>。ソウル俳句会は毎年5月にこの種の行事を行っているようだが、こういう状況だからこそ一層この種の文化交流を進めると同時に、その本質を究明する必要があるように思われる。それは日本統治期・戦後期を通じて、台湾における俳句や短歌を見ていくうえでも有意義な視点を提供してくれるのではないかと思われる。

<sup>5</sup> 詳細は前掲磯田論文を参照のこと。

<sup>6</sup> 『ソウル俳句会第十八句集』、2013年8月27日（ソウル俳句会のHPによる）。

## 1. 日本統治期の朝鮮俳壇と「朝鮮の子規」 朴魯植

俳句は朝鮮が保護国となる以前の韓国開化期に既に入っていたとされるが、日本統治期の朝鮮に俳句を持ち込んだのは、朝鮮に移り住んだ日本俳人たちであった。朝鮮半島で俳句活動が本格化するのには、日韓併合条約が締結された1910年以降のことであり、1920年代後半から30年代にかけて、在朝鮮日本俳人の俳句活動は京城を基点に朝鮮半島各地に拡がり、かつてない盛況を呈していたという<sup>7</sup>。この点について北川左人は自ら編纂した『朝鮮俳句選集』（1930年＝昭和5年発行）でこう述べている。

朝鮮における俳壇は、昭和の今日と大正の末期を比較したゞけでも実に隔世の感あらしめらるゝほどのなやかさとなっております。（中略）只今では、機関誌にいたしましても月刊十四を数ふるの壮観を呈してゐます。句会は都邑といふ都邑の到る処で開かれてゐます<sup>8</sup>。

1922年（大正11年）には朝鮮の俳誌は京城で発行されていた『松の実』一誌だけだったというから、朝鮮俳壇が1920年代に如何に急成長したかがうかがわれる。しかもそれは京城のみならず、地方でも活発に行われていたのである。

大正初期における俳句の普及状況を見るには『ホトトギス』の「地方俳句界」の各地句会の報告欄が一つの手がかりになる。明治30年（1897年）戦前期日本の代表的な俳誌として出発した『ホトトギス』も、明治末の段階の一時期は俳誌というより芸誌で、俳句欄も少なかった。これが明確に俳誌を目指すようになるのは、大正期に入ってからである。明治45年（大正元年）

7月号から、後の俳壇登竜門ともなる、高浜虚子選の「雑詠」欄が始まる。もっとも初めの内は、創刊以来続いていた指導的俳人らによる題詠欄（後に募集句欄）のほうが盛況で、雑詠欄が頭角を現すのは大正10年代以降であろう。それまでは発行所が松山から東京に移った明治31年10月以来続いている地方俳句界（最初は「地方俳況」）報告欄のほうが頼りになる。

朝鮮の俳句会が最初に現れるのは『ホトトギス』第2巻第12号（明治32年9月）の「仁川新声会」で、これは海外俳況報告の嚆矢である。しかし初めのうちは散発的で、報告される句会が安定的に増えていくのはやはり大正期になってからであろう。句会数も徐々に増え、やがて時に20句会を超えることもあり、朝鮮全土に俳句活動が広がっていく様子が伺える。台湾や「満洲」に比べると、朝鮮の方が盛んであったらしいことも分かる。

これらの「地方俳句界」の報告には、朝鮮俳人の句がほとんど出てこないが、実際にはかなりの数の朝鮮人が以前から俳句を詠んでいたと思われる。薄田斬雲の『暗黒なる朝鮮』（日韓書房、1908年）には45句の「朝鮮人の句」が載っているというが、朝鮮で最初の俳句集とされる戸田雨瓢編『朝鮮俳句一萬集』（1926年）は、まだ保護時代の明治37年（1904年）から大正15年（1926年）までに朝鮮各地で詠まれた俳句、特に京城日日新聞や朝鮮各地の新聞雑誌等から収録した一万余句を掲載しており、李雨史・朴魯植・金蓮花・李雨子ら8名の朝鮮俳人が登場している。収録句数は李雨史が67句と断然多く、かなり以前から詠んでいたものと思われる。朴と金は10句と9句、李雨子は4句で、他の朝鮮俳人は1～2句である。

北川左人編『朝鮮俳句選集』（1930年）にな

<sup>7</sup> 中根隆行「宗主国文芸の転回——朴魯植と日韓俳句人脈——」『社会文学』第37号、2013年、16頁。

<sup>8</sup> 北川左人「巻末の辞」、北川左人編『朝鮮俳句選集』

青壺発行所、1930年、『韓半島刊行日本伝統詩歌資料集、句集篇2』高麗大日本研究センター資料叢書5、2013年、803頁。以下句集は同叢書による。

ると、「本句集は、朝鮮人の創作せる多数の佳句を加へてある点において古今比類のなきものとなつてゐます」と自負しているように、朝鮮俳人の句数がずっと多くなっている。朝鮮人俳句作家の名は45名と飛躍的に増えて、収録された句は200句に迫っている。朴魯植・金蓮花・金大源・金櫻子・金玉奉・李雨子・田士英などが主な朝鮮俳人とされている。句数は女流俳人の金蓮花が47句と最高で、朝鮮で最も知られた俳人・朴魯植の38句を抜いている<sup>9</sup>（ただしこれは直ちに二人の俳句作家の力量を反映するものではない。虚子が選をする『ホトトギス』の雑詠欄は、大正10年（1921年）ころから投句者も増え、志ある俳人たちが腕を競う場となりつつあったが、朝鮮俳人としては初めて大正11年8月号に金蓮花、12年9月号に朴魯植がそれぞれ1句ずつ入選している。その後の入選状況を見ると、大正11年から朴の逝去した昭和8年（1933年）までの約12年間に、朴は59句入選しているのに、金の入選は31句にすぎない。金は朴の逝去後もなお昭和12年まで入選を続けているが、その間の入選句は4句だけである）。

中根隆行によれば、日本統治下の朝鮮半島は、在朝鮮日本俳人によって朝鮮俳壇とも称されるほど活況を呈していた。そして「その担い手に三つの層がある。まずは高浜虚子、河東碧梧桐、飯田蛇笏といった渡韓経験のある日本内地の俳人の層。次に石島雉子郎や楠目橙黄子、日野草城ら在朝鮮の日本俳人の層。そして朝鮮俳人の層である。朝鮮俳句はこれら三つの層が交差運動することによって形成される」という<sup>10</sup>。

第一の層でいえば、当時の日本内地俳壇の大御所・高浜虚子は、三度にわたって朝鮮を訪れ

て、朝鮮在住の日本俳人と交流・激励をしている。「虚子は、海を越えた俳句の拡がりを日本による勢力拡張と同化政策の構図に則って把握しているのである。在朝鮮日本俳人が抱えた問題もここに存する」と中根は指摘している<sup>11</sup>。

朝鮮での俳句活動は全土で盛んだったが、なかでも地方の代表的な俳句結社として知られていたのが、木浦の朴魯植（1897～1933）が昭和2年（1927年）3月に創刊した『カリタゴ』であった。同誌は朝鮮内の先輩諸俳誌と駢馳して発行部数も「毎号四〇〇部を誇り、同人一六名、賛助員一八名、選者も朝鮮および内地の約二〇名に依頼というのは、木浦が朝鮮半島南西に位置する地方都市であることを踏まえると異例の規模といえる」とされている<sup>12</sup>。朝鮮俳人の第一人者とされる朴魯植は大正10年（1921年）に俳句を始め、二年余で「川添の町幅広し夏柳」が既述のように『ホトトギス』雑詠に初入選（大正12年9月号）し、以後大正末年（1926年）までに15回、計18句が入選していたのである。朴は俳誌『カリタゴ』の選者に福岡の清原柎童を依頼し、柎童は木浦に移住する。いっぽう朴は『カリタゴ』に朝鮮人のための俳句欄「神仙爐俳壇」を設け、自ら選をして朝鮮俳人を育成しようとしたのである<sup>13</sup>。彼は「朝鮮の子規」と呼ばれるほどであったが、寿命まで子規に倣ったかのように、1933年結核のため36歳で早逝している。

高浜虚子は朴魯植を早くから高く評価し、1924年に朝鮮に滞在した折に「斯うした文学によって内鮮人を同化し得るならばどんなによい結果を齎すこととせう」といっている<sup>14</sup>。また、1927年7月『カリタゴ』創刊に際して、こんな

<sup>9</sup> 前掲『朝鮮俳句選集』「凡例」及び「解題」（韓国語）『韓半島刊行日本伝統詩歌資料集、句集篇2』363頁及び356頁。

<sup>10</sup> 中根隆行「朝鮮詠の俳域——朴魯植から村上杏史へ」『海を越えた文学』和泉書院、2010年、19頁。

<sup>11</sup> 中根前掲論文20頁。虚子の朝鮮訪問は4回だが初回（1911年）は俳壇訪問ではなかった。注26参照。

<sup>12</sup> 中根「宗主国文芸の転回」17頁。

<sup>13</sup> 中根前掲論文21頁。

<sup>14</sup> 中根前掲論文20頁。



祝句を贈っている。この句は創刊号の1頁目に掲載された。

この土地にこの人により雪解哉 虚子

「この人」は朴魯植である。「雪解」はこの朝鮮の土地にも俳句が浸透するようになったこと、さらに俳句を通しての「内鮮融和」を暗に指しているのだろう。木浦という土地柄や朴に対する虚子の期待が大きかったことが感ぜられる。また虚子が三度目の朝鮮俳壇訪問をしたのは、既に（当時としては）高齢の67歳で、昭和16年の8月に全日程20日間にわたって満洲・朝鮮を旅行した時であったが、最初は木浦にも行くつもりであったという。しかし木浦は地理的に不便で、夜行列車を使う必要があったので、旅で疲労していた虚子は木浦に行くのを諦め、代わりに大田の近くの儒城温泉で「南鮮俳句大会」を開くことに急遽変更されたのである。この「南朝鮮俳句大会」での虚子の挨拶には、「従来情操の方面に乏しいと言われる半島の人達に俳句を通じて日本人としての心持といふものを会得せしめることは寔に結構なことであるが木浦は疾くに朴魯植、張鳳煥、など半島人作家を出してその方面に貢献せられてを。今後も一層半島人の指導といふことに御盡しあるは結構と思ふ」という言葉がある。端的に言えば、虚子にとって俳句は「同化の具」であったことになろう<sup>15</sup>。

朴は日本俳人とともに俳句を詠み、日本人の信頼も厚かった。だが彼は日本人の中にあっても一人常に白い民族服を着て朝鮮人としての誇りを持っていたという。朴の代表的な句の一つに「親日と言はれて住めり花ばかち 朴魯植」（『ホトトギス』1932年10月号）がある。「ばかち」はユウガオの一種の「パク」の実の外皮を乾か

して水汲みなどに使用する朝鮮特有の容器であるが、在朝鮮日本俳人の間ではそれを作る元の植物そのものをも指していた。一種の誤用だが、数少ない朝鮮特有の季語の一つで、通常「パカチ」と表記した。いずれにせよ日常生活に即した、花鳥風詠的でない「朝鮮色」の濃い植物である。

俳句を通じて在朝鮮日本俳人と親交が深かった朴は、当然木浦の社会で「親日」と噂され批判されていたのであろう<sup>16</sup>。この句は朴の自嘲ともとれないことはない。だが彼の心底では自分が決して日本化されてはいないという自負があったのではなかろうか。これ以上朝鮮的なものはあるまいと思われる、「カリタゴ」を俳誌名とし、「ばかち」を朝鮮季語としておおらかに使用している、つまり日本的なるものの象徴のような俳句をみごとに朝鮮化するのに成功している、ともいえるのではないか。

逆にいえば、俳句を詠むことが「親日派」として批判されるおそれのある状況の中で、緊張感を持って句会に参加することは、それだけに俳句そのものの価値を純粋に求めさせる要因になるのではあるまいか。「日本化」への屈服ではない、文芸としての俳句の普遍性と朝鮮的独自性とを追及するメディアとして俳句が機能する可能性——転回の可能性——があるということである。それは日本俳人の句にとっては必然的に「非親和性」をもつことにもなりうる。そういう微妙な二面性が感じられる。

前述したように、朴は『カリタゴ』の中に神仙爐俳壇を設け、若い朝鮮俳人を育てようとした。やがてはこれを独立させて朝鮮俳人のための俳誌にしたいと思っていたようである。このことについて中根はこう述べている。

彼による朝鮮俳人の育成は、確かに親日

<sup>15</sup> 村上杏史「虚子歓迎／南鮮俳句大会——儒城温泉にて——」『ホトトギス』昭和16年8月号。

<sup>16</sup> 中根「朝鮮詠の俳域」28頁。

という政治性や文学による内鮮融和と矛盾するものではない。むしろその徹底化である。しかしそれゆえに、朝鮮郷土色の議論に絡めていえば、朝鮮俳人の輩出は、在朝鮮日本人による朝鮮俳句を非親和化する道筋へと繋がる可能性をもっている。もとより、それを実証することは難しい。だが他方で、宗主国文芸としての俳句のシステムに変容をもたらしたことは容易に説明できる<sup>17</sup>。

これに関連して想像を刺激するのは、俳誌名カリタゴのもつ象徴的意味である。カリタゴとは木浦に生息し、蚊よりも小さく刺されると痒くてたまらない虫であるという。こんな誌名をあえて採用した朴魯植は何を象徴しようとしたのだろうか。ソクラテスのいう「馬」（この場合帝国日本）にうるさくまつわりつく「虻」（朝鮮人民）の役割を演じさせようとした、と解釈したら穿ちすぎだろうか。

さらに朴魯植はその後継者と目される張鳳煥・李永鶴などの朝鮮俳人だけでなく、村上杏史（1907～1988）はじめ、日本俳人をも育てていることも注目される（彼の義弟・金玉峰も俳句を志し、『ホトトギス』雑詠欄にも3回入選しているのだが、1932年魯植より一足先に亡くなっている）。張・李・村上は朴と入れ替わるように、日本の敗戦直前『ホトトギス』が一時休刊になるまで、雑詠欄入選者の常連になったといってよい<sup>18</sup>。朴は俳句の創作と並んで俳人指導の上でも日本俳人と肩を並べる存在になったのである。

敗戦も間近の時期に李桃丘子（本名・漢水）がこの流れに加わった。李が俳句に出逢ったの

は1941年、中学2年の国語教科書の俳句に惹かれてのことであり、3年足らずで『ホトトギス』昭和19年（1944年）1月号の雑詠欄に「桃丘子」の俳号で入選している。解放後も句作を諦めず、『ソウル俳句集』第17集によれば、現在のソウル俳句会では会を発展・充実に導いたメンバーの一人とされている。このような事例は、日本統治期台湾の俳句界には類例が見られない。

村上杏史は昭和4年木浦で全羅新報社の新聞記者となり、はじめ朴とは短歌仲間だったが、朴に感化されて俳句を始めたという<sup>19</sup>。高浜虚子にも出逢っている。1933年朴病没後、清原栲童も病を得て帰国すると、1934年村上は『カリタゴ』主宰として後を継いだ。見事な日・朝の連携プレーであった。弟の村上星洞も俳人であり、張や李、村上と『ホトトギス』雑詠欄で入選を競い合っていた。

戦後村上は日本に帰国、松山で俳句会「柿」に参加し、のち主宰となる。「柿」には村上の縁で、李桃丘子ら多くの韓国俳人が名を連ねることになる。また朴の死後50年となる1983年（牡丹忌）に、『朴魯植俳句集』が村上により柿発行所から刊行されたのである。

以上の考察を一般化していえば、朝鮮における俳句の導入・普及は、一面において植民地化による文化支配であるにしても、被植民者が宗主国側に一方的に支配されるに任せていたわけでは必ずしもなかったというべきであろう。ある文化を受容した主体がこれにどのように働き返したかが、まず問われるべきではなかろうか。

## 2. 日本統治期の朝鮮と台湾における俳句の展開の比較的考察

これを同じ日本統治期の台湾の場合と比べて

俳号のみを記すことになって以後張鳳煥に戻った。李永鶴は姓名ともに日本名に変ることが予告されたが、その後当分出句せず、俳号のみの表記になった時から再び李永鶴で入選している。

<sup>19</sup> 中根「宗主国文芸の転回」22頁。

<sup>17</sup> 中根「宗主国文芸の転回」21頁。

<sup>18</sup> 雑詠欄の作者名の表記に創氏改名の影響は実質的に見られない。張鳳煥は姓が櫻井となり、一度だけ櫻井張鳳煥とこれまでの氏名を三字の俳号として表記したが、その後雑詠欄が紙面圧縮で三段組みとなり、名か

みよう。台湾に俳句が導入されたのは、時期的には朝鮮と大きく変わらないとみられるが、日本統治期に朝鮮の朴魯植や張鳳煥のような顕著な動きをした台湾俳人は見当たらない。『ホトトギス』雑詠欄を見ると、台湾俳人の最初の入選句は、昭和3年5月号の台北の陳武王「門松に螢飛び交ふ蕃社かな」と思われる。陳は同年8月号にも入選しており、昭和4年2月号では、花蓮港の呉金城「月見する蛇木の下でありにけり」が入選している。その後昭和9年1月号に陳緑泉、昭和12年には黄朝木が同年中に5回にわたって入選している。このように台湾俳人の入選は朝鮮俳人よりはやや遅かったけれど、入選した人数は必ずしも少なくない。しかし台湾俳人の入選は散発的・一時的で継続性が見られないのである。そして俳句や短歌が盛んになったはずの皇民化期になると、昭和13年5月号の黄朝木の入選を最後に、入選者が皆無になってしまう。戦時下台湾俳壇で名の知られた王碧蕉も入選の経歴がない。

これには台湾俳人と日本俳人のグループとの協働関係の有無も関係しているように思われる。朝鮮俳人の雑詠欄継続入選者のうち、女性俳人金蓮花は同じく雑詠欄入選者の日本俳人住繁月魄の夫人かと思われる（一時期「住繁金蓮花」の名で投句）。後はほとんど木浦出身の朴魯植・張鳳煥・李永鶴の三人に限られる。かれらは同じく継続入選者である木浦在住の日本俳人村上兄弟ら『カリタゴ』と句作の上での協働関係（中根のいう交差運動）があったと思われる。台湾俳人はそういう協働関係に乏しかったのではなからうか。

実は台湾俳人の「唯一の例外」として昭和18年10月号に李錦上の句「朝顔にしろがねの星大

きかり」が入選しているのだが、これは台湾からの応募ではなかった。投句者名が「三重・李錦上」とあるように、彼は入選当時三重県四日市の海軍燃料廠工具研修所で研修中であり、地元の俳句結社「冬木会」に属し、主宰の杉島幽鳥から懇ろに指導を受けていた。彼はホトトギスへの入選が俳壇登竜門であることもよく心得ていた<sup>20</sup>。

島田謹二らによれば、1930年～40年当時の台湾人は「国語の実用的理解から一歩進めて今や味解の方へ入りかけてゐる」。ただし小説など「比較的形式的約束のゆるやかな、いはば非伝統的な様式の文学には、内地でも名を知られた本島人作家を出しかけてゐるやう」だけでも、「俳句や短歌のやうに、或意味で《日本的》といふべき洗練されたかなり特殊な心境を必要とする部門には、まだ本島人の優秀な作家はゐない」と評されている<sup>21</sup>。確かに日本統治期末期に登場した王碧蕉のような台湾俳人は、季語論で阿川燕城を批判するなど、台湾俳壇で異色な存在だったともいえようが、俳句結社を主宰するような存在ではなかった。花城和亭は「日本統治期台湾俳壇点将録（稿）」を作成して、これは「遊び」であって、「俳人の優劣を論ずるものではなく、該時期の台湾俳壇を紹介せんがためのささやかな試み」と断りながらも、日本統治期に台湾で活動した日本人俳人を百十数名も挙げながら、台湾人俳人としてはわずかに上記の王碧蕉の名しか挙げていない<sup>22</sup>。

もちろん、当時の台湾人の中に、専門家クラスではないにしても、短歌や俳句を詠める素養のある人がかなりいたことは確かである。いわゆる皇民化期の台湾は一般人の間でも俳句や短歌が詠まれるようになってきた時期であり、戦

<sup>20</sup> 磯田一雄「皇民化期におけるある台湾人の俳句習得過程の実際」『天理台湾学会第23回研究大会・研究発表要旨資料集2』、2013年6月29日。李錦上は今なお台北俳句会中心に句作を続けている。

<sup>21</sup> 神田喜一郎・島田謹二「台湾における文学について」『愛

書』1941年5月、『日本統治期台湾文学文芸評論集』第三巻、緑陰書房、所収。

<sup>22</sup> 『ゆうかりぶたす』創刊号、台湾義守大学応用日語学系尤嘉麗普達斯編集委員会、2010年、49-53頁。

後台北俳句界や台北歌壇に参加した俳人や歌人には、この時期に日本語短詩文芸の素養を身に着けた人が多い<sup>23</sup>。

台湾にはまだ優秀な台湾俳人はいない、という島田らの評価は1930年代が終わり40年代に入る時点でなされたものである。それに対して朝鮮では、それより十年以上前から、朝鮮俳人やその作句について多くの証言・証拠がある。既に見たように、戸田雨瓢編『朝鮮俳句一萬集』（1926年）にはすでに相当数の朝鮮俳人の句があるし、北川左人は『朝鮮俳句選集』（1930年）で「朝鮮人の創作せる多数の佳句を加えてある」と自負している。また安達緑童は「今や全鮮には多数の鮮人作家があつて、如何なる俳誌にも其名の見られないものはなくなつた。鮮人作家の黄金時代も近きにある様な気がする。其様に多数の鮮人作家が殖えたのも、朴魯植氏の太陽の様な存在が入門の刺激になつたのだと思ふ。」と述べている<sup>24</sup>。朴魯植は『カリタゴ』だけでなく、選者として関係した雑誌も朝鮮だけでなく内地にもあり、また直接指導をした地方句会も数多くあったという。句会の主宰となり、俳句を指導し、内地の俳壇にも刺激を与え、日本人の弟子さえ育てた文字通りの「朝鮮の子規」が、既に1920年代に活動していたのである。

一方台湾で最初の俳句集、三上三字塔編『台湾俳句集』（1928年）に台湾俳人の句は見られない。その続編ともいふべき山本孕江・三上三字塔編『ゆうかり俳句集』（1935年）にも台湾俳人の句はほとんどない<sup>25</sup>。そもそも台湾の日本俳人は台湾俳人にあまり関心を持っていな

かったように思われる。これらの俳句集には『朝鮮俳句選集』などと違って、台湾俳人に関する言及が全く見られないのである。また内地俳壇の要人は「満洲」・朝鮮にはしばしば赴いていたが、台湾俳壇はどちらかといえば蔑ろにされていたといえよう。

その要因としては、虚子に典型的に見られるように、「内鮮融和」の具の一つとしての俳句という意識が、三・一独立運動後の「文化統治」への転換と連動して生まれていたのかもしれない。虚子は1924年、1929年、1941年と生涯に三度も朝鮮に渡り現地の俳壇と交流しているのに<sup>26</sup>、台湾に渡航したことは一度もない。1936年フランス旅行の帰路、乗船が基隆に寄港した折に、台湾神社参拝のためほんの数時間上陸して台北まで往復した自動車の中で、現地俳人・山本孕江と台湾の季語問題を論じただけである。日本の中央俳壇は、朝鮮と台湾とでは力の入れようが全く違っていたのである。他の多くの指導的な俳人についても似たことがいえる。台湾の日本俳人はこのことを不満に思っていた節がある。

### 3. 地方色を俳句にどう盛り込むか（1） ——「台湾季語」と『台湾歳時記』

日本統治期朝鮮や台湾に持ち込まれた俳句には、「地方色」としての朝鮮ないし台湾の独自性の表現の問題——つまり、現地の特色をどう俳句に詠みこむか、という朝鮮俳壇と台湾俳壇に共通する課題があった。先に台湾から見てみよう。

<sup>23</sup> 磯田一雄「植民地教育史研究と台湾歌人」『天理台湾学報』第22号、2013年。

<sup>24</sup> 安達緑童「鮮人と松尾芭蕉」『かりたご』1933年7月、中根隆行「宗主国文芸の転回」より再引用。

<sup>25</sup> 台湾俳人かと思われる作者は数人いるのだが、凡例によれば同句集は題材・作者共に台湾だけでなく「内地は勿論北海道、朝鮮、満洲、中華民国等広範に互りたるもの」なので、姓名だけでは何人と決め難い。事実

朝鮮の張鳳煥の句も一句載せられている。確実に台湾俳人といえるのは呉阿泉（1句）だけである。呉は『台湾教育』の文苑欄などに多くの投句をしていた。

<sup>26</sup> 韓国併合直後の1911年にも虚子は訪れているが、この時は現地視察が目的で翌1912年小説『朝鮮』を刊行している。また三度の朝鮮俳壇訪問はいつも「満洲」旅行とセットだった。



台湾在住の日本俳人が早々に台湾季語の必要を訴えたのは、気候を始め自然環境や文化環境が日本と大きく異なっており、特に気候の違いが作句を困難にしたためであった。最初に期台湾に渡った日本俳人の一人、渡辺香墨は、内地なら秋に咲く鳳仙花が台湾では初夏に咲くのを目にして、日本で培ってきた季感が乱れ、作句できなくなったと訴えている。渡辺に限らず、当時台湾に渡った日本俳人は同じことを訴え、そのため台湾の実際の風景を詠もうとせず、内地での経験に基づき、内地風物の回想句を詠むようになったという。だがそういう投句に対して内地の『ホトトギス』の編集者はこう呼びかけている。

北海道、台湾、海外諸地方の人々は其地特有の風光を詠ずる方よし。異なりたる風土に在りて、尚内地の景色を想像して吟咏するは労多くして功少なし。内地各地方の人々にても可成自己周囲の特殊なる光景（天然人事トモ）に着眼するをよしとす<sup>27</sup>。

小林李坪（本名：里平）は、これに対して「気候・人情・習俗」などの「台湾趣味」のある句を詠むことを勧め、その手助けになるように『台湾日日新報』紙上に「水引草」という連載を1906年9月から1907年5月まで計41回行っている。こちらは日本内地で用いられているのと同じ季語から台湾的な季語に入っている。その中には「春聯」「閩帝祭」「接神」（以上春）、「釈迦果」「蕃木瓜」「椰子の実」（以上秋）、「炮仔（爆竹）」「送神」（以上冬）などのような、台湾季語と呼ぶべき語がある。そしてほとんどの季語に例句を数句添えている。小林はその後さらに「俳諧小話」という連載も行い、これらの語をまとめ

て1910年に『台湾歳時記』として刊行したのである<sup>28</sup>。

小林によれば『台湾歳時記』刊行の目的は、「人事、動物、植物の三部類中台湾に特殊なる行事季語を蒐集説明するにあり」という<sup>29</sup>。「台湾に特殊なる行事季語」としては、春夏秋冬の順にそれぞれ48、78、50、30と全部で206の季語を挙げている（「新年の部」に相当する語は春に含まれている）。台湾季語としては数的には必ずしも少なくないと思われるのだが、問題は各季語の説明は時にくどいほど丁寧なのに、例句が非常に少なく、しかも偏っていることである。すなわち、「春田植（台湾名）播田」に7句、「浜万年青」・「飯春花」・「蓮草」に2句ずつ、「噴春」・「蕃花」・「ジ`アヤア」・「鳳梨」・「榕樹」・「施餓鬼」・「火籠」・「神送」・「甘蔗」に各1句と、全部で計22句が挿入されているだけである。これでは「台湾趣味」の句を詠む参考としては少々物足りないのではなからうか。むしろ「水引草」のほうがよほど句作の手引きとしての配慮があったように思われる。

この歳時記は台湾俳壇における実際の句作でどの程度影響があったのだろうか。台湾における最初の俳句集とされている、三上惜字塔（本名、武夫）が編纂した『台湾俳句集』（ゆうかり社、1928年）は、大正11年から昭和2年までの6年間に作られた、約3400句を収めている。この俳句集は歳時記の方式に倣い、春・夏・秋・冬・新年の五季に分けて、時候・乾坤・人事・動物・植物の5領域にわたり、全部で643の季語の順に句を配列している。この句集の句を見ると、大部分は従来の歳時記にある季語の句であって、台湾季語といえそうなのは、春の「\*孔子祭」「媽祖祭」「珊瑚刺桐」「椰子の花」「苦令花」「檳榔花」、夏の「城隍祭」「龍骨車」「水牛」「緑珊瑚」「鳳梨」、

<sup>27</sup> 『ホトトギス』第7巻第7号（明治37年4月10日）「地方俳句界」の後記の後半部分。

<sup>28</sup> 沈美雪「俳句における《台湾趣味》の形成——明治期

台湾における俳句の受容と展開を通じて」『台湾日本語文学報』25、台湾日本語文学会、2009年6月、56頁。

<sup>29</sup> 小林里平編『台湾歳時記』政教社、1910年、「凡例」。

「\*愛玉子」、「\*バナナ」「龍眼」「相思樹花」「茉莉花」「龍舌草」、秋の「朱欒」「椰子の実」「玉蘭」、冬の「狸々木」、新年の\*「初新高」「春聯」くらいであろう（\*はこの句集で新たに加えられた季語で、あとは小林の『台湾歳時記』にある季語）。

いわゆる「台湾俳句」の主張は、台湾最大・最長の俳誌となった『ゆうかり』を中心になされるのだが、その中心となったのは1931年より選者になった山本孕江であった。山本は次のようにいう。「足元を見つめると、榕樹、椰子、檳榔、水牛、白頭鵠、廟…など目のくらむほど、俳句に詠みこめる多くの台湾独自の対象がある。そこで「自然を観察して真実の写生に努め、一方句の表現技巧に苦心をしつゝけて」来たが、「一つ困ったことには常夏の台湾のこととて、四時濃緑の山々を眺め、真紅の花の咲き絶ゆることなく、内地の厳冬のといふ折に、台湾では秋の虫が鳴き盛り、螢さへとぶといふ、俳句では大切な季題を全然超越した台湾の自然、季節的变化に伴はない台湾の動植物の状態に、季題をどう取り扱つてい、かといふことに少なからず迷わされました」というのである<sup>30</sup>。

子細に見れば、台湾にも四季の移りはある。ということはやはり台湾の季題も「常夏」というような形ではなく、それなりに四季に区分されるべきだということになる。上の歳時記の台湾季語もそのような台湾独自の四季区分によって定められたものであろう。

『台湾俳句集』より7年後に刊行された山本孕江・三上惜字塔編『ゆうかり俳句集』（ゆうかり社、1935年）は、1928年1月から1934年12月に至る七年間に『ゆうかり』に載せられた約2万句からの選句に、「先輩諸氏より寄稿せられたる近詠を併せ」、約9400句を取録している。『台湾俳句集』と同じような形式で編纂され

ているが、新年・春・夏・秋・冬の五季に分け、時候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物の7領域にわたり、合計1362語の季語の句を掲載している。全体の季語数は『台湾俳句集』の2倍以上に増え、台湾季語と認められる語も『台湾俳句集』よりはかなり数が増えている。内容からみて台湾季語と思われるのはほぼ次のように大幅に増えている（〔 〕は筆者の注記）。

新年の部：春聯、弄獅、元宵、爆竹など

春の部：媽祖祭、豚祭、蛇木の芽、護謨樹の花、オキザリス、朱欒の花、竜眼の花、浦葵の花、珊瑚刺桐の花、胡蝶蘭など

夏の部：スコール、龍骨車、マラリヤ、愛玉子、城隍祭、熱帯魚、鬮魚、月桃の花、檳榔樹の花、相思樹の花、月來香、鳳凰木の花、月下美人草、バナナ、アラマンダ〔キョウチクトウ科の低木、アリアケカズラ〕、椰子の花、木瓜、茄苳樹の花、玉蘭、バナナ、鳳梨、木瓜など

秋の部：台展、雙十節、霧社忌、檳榔子、椰子の実、朱欒、荔枝、龍眼、鳳凰木の莢、通草〔紙八手の別名〕など

冬の部：ホイコウ〔火鍋か〕、狸々木など

「凡例」によれば「季題分類は改造社出版俳諧歳時記及今井柏浦編歳時記大観等に倣ひ、本島特有の季題については未だ模範とすべき歳時記なかりし為往々再考を要するものなきにあらざれどもすべて作品を尊重し之を採録せり」という（下線部=引用者）。小林の『台湾歳時記』を無視したような言い方である。実際には特に植物などにかなり共通する季語もあるのだが、編者としてはあくまで詠まれた俳句から拾ったという意識が強いのであろう。

台湾季語を増やしていても、その句が『ホトトギス』を中心とした日本の中央俳壇で認め

<sup>30</sup> 山本孕江「台湾の俳句と私」『ホトトギス』昭和2年8

月号。

られなければ、単なるローカル現象に終わってしまう。高浜虚子編『新歳時記』（1934年）で「温突」「春聯」「鳳梨」「バナナ」「仏桑花」「蝸」などは既に季語とされていたが、山本らの目指すところは、さらにその他の台湾季語が季節配当をも含めてそのまま季語として中央俳壇に認められることであったといえよう。

だが、虚子は1936年の「熱帯季語論」で、山本の主張を認めず、いうところの台湾季語を、「媽祖祭」「城隍祭」など異文化性の強いものを取り除き、自然現象を中心に、しかも季節別に分けず「熱帯季語」として一括して、すべて「夏」とすることを主張した。「日本本土に興った俳句はどこ迄も本土を基準として、本土に生れた歳時記を基準として、其歳時記は動かすべからざる尊厳なるものとして、熱帯の如きは一括して「夏」の季に該当すべきものである。さうでないと内地の季題に混乱を来して收拾すべからざるものになる」というのである。その結果、『新歳時記』改訂版（1940年）には、スコール・熱帯魚・鳳凰樹・竜眼・檳榔樹・ゴム樹・月下美人・バナナ・椰子などが、新たに季語として入れられることになったが、これらの季語の配当はすべて7月、つまり「夏」の部に入れられた。そして虚子は山本を妥協させるべく、『ホトトギス』の同人に引き込んだのであった<sup>31</sup>。

#### 4. 地方色を俳句にどう盛り込むか（2）

##### ——『朝鮮固有色辞典』

これに対して、朝鮮在住の日本俳人たちの間では、「朝鮮色」のある俳句を、ということは盛んに言われていたが、「朝鮮季語」にはあまりこだわっていなかったように思われる。朝鮮で発行された多くの句集、例えば『朝鮮俳句一萬集』（1926年）、『句集朝鮮』（1930年）、『朝鮮俳句選集』（1930年）、『青壺句集』（1936年）な

どの俳句集も『台湾俳句集』や『ゆうかり俳句集』と同じように、季語ごとにまとめて句が配列されており、『河越風骨遺句集』（1933年）や川崎千鶴子『くすり吐く』（1935年）のような個人の句集でもこれが踏襲されている。『朝鮮俳句選集』の場合これは句集が句作上の手がかかりとなるように工夫したものとされており、季語の解説のない、句例だけの歳時記を目指す意識があったといえることができる。だが各俳句集ごとに朝鮮季語らしい語（日本の歳時記に普通ない季語）はきわめて少ない——台湾の場合に比べると、ほとんどないといってもいいくらいである。

『朝鮮俳句一萬句』の編者の戸田雨瓢は「凡例」で「編者は是が編纂に着手するや暇ある毎に普く鮮内各地を旅行して親しく其の風物に接し是に依りて多く朝鮮特種の色彩を表現せる作句を採り半島の文芸を広く世に紹介せん事に意を用ひたり」といつているが、朝鮮季語らしい語としては冬の部に「温突」があるだけである。

『句集朝鮮』には「温突」のほかに、秋の部に「パカチ」が出てくる。同じ年に出た『朝鮮俳句選集』は、「凡例」で「本句集は、特に朝鮮の地方色と朝鮮に最も縁の深い満洲の地方色とのあざやかに現はれた句を努めて多く取入れることにいたしました」とある。朝鮮らしい季語としては「温突」「パカチ」のほか、新年の部に「爆竹」「春聯」を加えている。昭和10年代に入ってから刊行された『落壺句集』も同じく「温突」「パカチ」「爆竹」「春聯」の四語がある。

朝鮮の俳壇では、朝鮮色を表現する用語を季語に限定しなかった。一例として「パカチ」を挙げよう。『朝鮮俳句選集』では、秋の部の季語「瓢筆」の言い換え（類語）として、小活字で「蒲蘆」・「ふくべ」・「ひさご」・「千生瓢筆」・「青瓢筆」・「種ひさご」などと並んで、「パカチ」

<sup>31</sup> 『山本孕江俳句集』（ゆうかり社、1942年）の「序」で、

虚子はこのいきさつを説明している。

が出ている。季語としての「パカチ」の句例は「塀越えて二つさがりぬ大パカチ 天然松」一句だけである。いっぽう「寒食のパカチ洗へる 尼僧かな 左人」のように、季語としてではなく容器としてのパカチを詠んだ句があちこちにある。朝鮮色を表すにはこの意味でのパカチのほうが鮮明だし、韓国語のパカチの語意としてもこのほうが正しい。パカチを作る瓢の一種の植物はパケというのだが、朝鮮の日本俳人はこれもパカチと呼んだのである（この意味では青パカチ、花パカチなどと使われたことが多いようである）。

もうひとつ朝鮮季語らしいのは「温突」である。これは暖炉の類語としてではなく、独立した季語として扱われており、『朝鮮俳句選集』では句例も17句が挙げられている。朝鮮俳人の句と日本俳人の句を2句ずつ挙げよう。

温突に薬用蛇の釣られける	金最命
温突の上座に居りて長煙管	金昌成
温突の煙にはやき暮色かな	李兵衛
温突のいささかあつく夜の客	暁草

これらの句を見ると、概して朝鮮俳人はより朝鮮的な風景を捉えて詠んでいることがわかる。日本俳人の句は温突をストーブと入れ替えても大差ないような句が多い。「温突」という「朝鮮季語」だけで「朝鮮色」を表すというのでは、句としても浅いものになる。

「爆竹」「春聯」は朝鮮だけではなく、むしろ台湾や、朝鮮と当時密接な関係のあった「満洲」とも共通の季語だから、本当に朝鮮季語らしいのは「温突」と「パカチ」であろう。その「パカチ」と「温突」は高浜虚子編『新歳時記』（昭和9年）では「春聯」とともに季語とされている（「爆竹」は昭和15年の改訂版から）。つまり、朝鮮の日本俳人たちはあえて「朝鮮季語」を唱える必要をほとんど感じていなかったのではな

からうか。一方編纂者の虚子から見ても、「パカチ」（九月に配当）や「温突」（十二月に配当）を加えることによって日本内地の季語の体系に混乱が生じるとは思わなかったであろう。

要するに朝鮮の日本俳人は日本の歳時記を尊重し、これに忠実に句作をしていたといえる。朝鮮では日本内地と異質の気候風土にふさわしい新しい季語を求めるという傾向があまり見られない。「朝鮮色」を俳句で表現することは、むしろ季語以外の朝鮮特有の状況を表す用語に求められた。これは台湾の日本俳人との大きな違いといえるであろう。

その実態を明らかに示しているのが、北川左人『朝鮮固有色辞典』（1933年）である。これは朝鮮の「風俗習慣」「信仰祭祀」「音楽遊戯」「天文地理」「官制一斑」「学事衛生」「商事金融」「工芸鉱産」「耕農営林」「漁撈水産」「動物植物」「朝鮮史略」の各分野にわたる二千以上もの項目について、簡にして要を得た解説をつけたもので、コンサイス朝鮮生活百科事典の観がある。小林里平の『台湾歳時記』の朝鮮版とみられる点もなくはないが、内容的にはこちらの方がはるかに充実しているし、また近代的といえる。

一つには、小林の『台湾歳時記』は項目が少ないという以上に視野が狭く、日本人の目を引きやすい台湾のエキゾチックな面を中心に目を向けているのに対し、北川は当代朝鮮における生活全般にわたり詳細にその特色を描いていることである。さらに重要なのは俳句の扱い方である。小林はほんの思いつき程度にごく少数の項目に句を配しただけだが、北川は「例言」の中で「所々に、俳句を挿入いたしましたのは、朝鮮のローカル・カラーが、従来どの程度に俳句化されつゝあるであらうかの一斑をも示し、且つ、近時、朝鮮人にして俳句を創作するものが尠くないといふことの一端をも示して置きたかったからでありました」（下線部＝引用者）。確かに例句の挿入は「ところどこ



ろ」であるが、句を配する項目の選択は適切で句数も自在に変化している。例えば「風俗習慣」の部門の行事の項では、62項目の内、正月（6句）、爆竹（1句）、夜光鬼（1句）、髪焼く（2句）、防三災（1句）、角塗（2句）、春聯（6句）、記念植樹（6句）、浴佛日（2句）、端午（5句）、七夕（2句）、曝書（2句）、重陽（2句）、除夕（2句）、百中曆（1句）と15項目に例句を添えている。また特に句の詠まれやすい動物植物の項では例句の現れる頻度も句数も多くなっているなど、実作への配慮が十分に見られると同時に、朝鮮俳人の存在をアピールする狙いのあることも、台湾には見られない特徴であろう。

『朝鮮固有色辞典』は例句集としての歳時記の役割を果たしながら、決定的に違うのは全項目を季節別に分類していない点である。解説している語は朝鮮の特色を示しているが、特定の季節の語としてではない場合のほうがずっと多い。つまり「朝鮮色」を出すのに有用な語を数多く定めてはおくが、それが季語である必要は必ずしもないということである。「風俗習慣」の部門からいくつか季語以外の語の例句を見よう（季語は下線部の語）。

「白衣」

百姓の白き衣やかげろへる 朴魯植  
 枯野渡る人の白衣を撲つ日かな 橙黄子  
正月の白衣めでたき水汲女 草城

「煙管」

畦に置く煙管と杏や田草取 柴朗  
 長煙管くわへてチゲや青田風 洪淳明  
 対岸の火事を見てをり長煙管 松洞

「妾」

ぶらんこの郡主の妾もと妓生 木雨  
 妻妾のはべれるなかの月見かな 朴魯植

これらの三語は朝鮮固有色を表す語とされているものの季語ではない。これらの句を見ると、先の「温突」の場合と同じように、日本俳人の句は比較的表面的な、異国情緒に惹かれている感じがするのに対し、朝鮮俳人の句のほうは民族的色彩を生活に即してより深く表現しているように思われる。

似たようなことは台湾でも生じている。例えば台湾独自の季語「白柚」を用いても、次の例ではその働かせ方に明らかな差がある。単に直接の美的感覚を描いた句と、その感触を契機に親情や家郷の記憶を表現している句との違いである<sup>32</sup>。

手に触れてよき感触や白柚むく 佐藤小峰  
 母の腕にだかれし思ひ白柚薫ず 王碧蕉

日本俳人たちにとって、日本内地と当時の朝鮮とでは、季節感の違いより社会的文化的な差異のほうがはるかに大きく感じられたのではないだろうか。これに対して台湾では何よりも季節感の違いが大きく感じられたので、勢い動植物など自然が中心となり、それに独特の年中行事的なものが付加されたのではなかろうか。そこに「朝鮮色」と「台湾趣味」（台湾季語）との違いが生じたのであろう。だが「朝鮮色」にせよ「台湾季語」にせよ、どこまで深く地方色を出せたか、さらに普遍的な人間性の表現に迫れたかは、また別の問題である。

おわりに：解放後の韓国と台湾における日本語短詩活動

日本統治期の朝鮮俳壇と台湾俳壇の違いを端的にいうならば、日本の敗戦間近になっても、台湾では朝鮮の朴魯植やその後継者のようなすぐれた台湾俳人はほとんど生まれていなかった。

<sup>32</sup> 磯田一雄「皇民化期台湾の日本語短詩文芸と戦後の再

生」『天理台湾学会年報』第19号、2010年、27頁。

台湾のほうが日本統治下に入る時期は早いのだが、俳句が普及する速度とレベルは、朝鮮のほうが早くかつ高かった。その背後には日本内地の中央俳壇、在朝鮮日本俳人や句会、朝鮮俳人のグループ相互間の協働関係があった。少なくとも俳句に関する限り、台湾よりも韓国のほうが日本統治期の歴史的遺産はずっと大きいのだ、ということになる。このことは日本の敗戦後、どのように韓国や台湾の文化にかかわりを持つであろうか。

現在韓国にも台湾にも、小規模ではあるが日本語による俳句を詠む集団が存在している。台湾には俳句結社ないしグループとして、「台北俳句会」（1970年創立、会長・黄靈芝）と「春燈台北俳句会」（1980年創立、指導・廖運藩）、「台湾川柳会」（1994年創立、会長・杜青春）、さらに短歌結社としては台湾歌壇（1968年創立）のほか二、三の短歌グループがある。韓国には台湾の俳句会よりは歴史が浅いが、日本人会の活動に韓国俳人が参加する形の「ソウル俳句会」、韓国外国語大学の句会である「草笛俳句会」、韓国俳句研究院（院長・郭大基）に所属する句会（この句会の句は「休句会」の名で、現在九州大分の俳誌『蔭』（主宰・倉田紘文）に毎号掲載されている）などがある。

韓国の俳句活動は台湾の場合と違って結社型ではなく、何らかの組織に属しているのが特徴である。だが活動の内実は台湾のそれよりむしろ多様で、国際交流もあり、さらに研究活動とも繋がりのある点が注目される<sup>33</sup>。また高麗大日本研究センターによる『韓半島刊行日本伝統詩歌資料集』全45巻（2013年）の復刻・刊行（「刊行の辞」や各資料の「解題」は韓国語）は、旧「満洲」地域と朝鮮半島における俳句・短歌・川柳の実態の研究に今後資すること多大であり、学

術的にも高く評価されるべきであろう。この企画は国際交流基金の後援を受けたとされている。これは日韓文化交流という以上に日韓文化協働ともいうべきであろう。拙論もこの資料集に多くを負っている。

今は詳述することを控えるが、これらの活動が今日に至るまでには、台湾でも韓国でも多くの抵抗や困難があった。台湾では1967年に「台北歌壇」（現・台湾歌壇。発足当初は「台北短歌研究会」）、1970年に台北俳句会が発足している。だが日本語は公的に使用禁止、10人以上の集会には届け出が必要だった。当時の台湾の俳人や歌人たちは、1987年に戒厳令が撤廃されるまで、あたかも「隠れキリシタン」のような状況にあったという<sup>34</sup>。台北俳句会会長の黄靈芝（1928-）は俳句の外、小説や短歌・研究書などほとんど日本語で書いているが、「親日」ではなく、「親日本語派」と自称している。

いっぽう、解放後の韓国にも少数ながら日本語で俳句や短歌を詠み続けてきた人たちがいた。朴魯植の流れにつながる李桃丘子はその一人である（ソウル俳句会に参加していたが最近亡くなった）。だが韓国での俳句活動は台湾に比べて一層容易ではなかったと思われる。台湾では閩南語や客家語を母語とする大部分の台湾人にとっては、母語ではない中国語（北京語）を強制する国府の統治に対抗して、日本語で表現することがむしろ日本統治を体験した台湾人のアイデンティティの媒体となる側面があった。しかし韓国では（日本語に対する反発がなかったとしても）抑圧・収奪されてきた母国語が完全に回復されたのであるから、詩的表現において日本語を使用する社会的基盤が失われていたのではないかと思われるからである。

これらの諸活動の系譜と現状を見る時、日本

<sup>33</sup> ソウル俳句会HP、および東聖子「韓国国際俳句の最新事情」『アジア遊学152・東アジアの短詩形文学——俳句・時調・漢詩』勉誠出版、2012年。

<sup>34</sup> 黄靈芝「戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台湾俳句歳時記』言叢社、2003年、285頁。

統治期における俳句活動の「遺産」を前提に、韓国と戦後台湾における俳句活動とを相互に比較して考察することが有意義であると考えられる。さらにそこから派生した「ハングル俳句」や（中国語、ないし台湾語による）「湾俳」なども考察の対象となろう。そこから新しく見えてくるものに期待しつつ、改めてこの課題に取り組みたいと思う。

【あとがき】本稿の作成上、愛媛大学准教授中根隆行氏の論考に多くの教示をいただいたことにお礼申し上げたい。また高麗大日本研究センター『韓半島刊行日本伝統詩歌資料集』全45巻（2013年）の『句集篇』は中核的な資料の一つとなったことに感謝したい。なお本文中では敬称を省略したことをお断りしておく。